

ジイドにおける変化と無変化の様相

—その人間的時間をめぐって—

津 川 廣 行

(1) はじめに

ジョルジュ・プーレの『人間的時間の研究』(*Etudes sur le temps humain*)の影響をうけて以来これに横して筆者は「アンドレ・ジイドにおける人間的時間の研究」といった角度からジイドの問題を再検討してきた。幸か不幸かプーレは『人間的時間』四巻のなかで、ジイドについての章はもうけなかった。もっとも彼はその序文およびマリヴォーについての章で、瞬間に生きた作家の一例としてジイドを引き合いに出してはいる¹⁾。また彼は、ジイドの研究雑誌《*André Gide*》の第三号に寄せた小論文 *L'Instant et le Lieu chez André Gide* において²⁾、「瞬間」の問題を豊富に提供してくれる『地の糧』について論じてはいる。だがジイドにおいてもっとも重要な「瞬間」という時間も、その人間的時間全般の一斑であるにすぎない。

さて、自らの文学的人間的問題の大部分を何らかの意味で時間とかかわらせているジイドのような作家の場合、何らかの視点を定めることによ

《Abréviations》

PL. I ……André Gide, Pléiade, t. I, 《*Journal, 1889-1939*》, Gallimard, 1970.

PL. III ……André Gide, Pléiade, t. III, 《*Romans, Récits et Soties, Œuvres lyriques*》, Gallimard, 1975.

- 1) Georges Poulet, *Etudes sur le temps humain I*, Éditions du Rocher, 1976, p. 46. および, Georges Poulet, *Etudes sur le temps humain II*, Éditions du Rocher, 1976, p. 18.
- 2) Georges Poulet, *L'Instant et le Lieu chez André Gide*, 《*André Gide 3*》, Lettres Modernes, 1972, pp. 57-66.

てその時間の問題をふるいわけることが重要となってくる。筆者はとりわけ「変化」にたいするジイドの見方を追跡することによって彼の特殊性が浮き彫りにされると見た。一般に何らかの変化にたいする関心によって時間という観念が人間に呼びさまされるのだとすれば、時間の問題について論ずる際、プーレのように過去、現在、未来だとか、瞬間、持続という尺度を信頼するよりも、「変化」にかかわる観念の検討によって過去だとか現在だとかの問題を解き明かしてゆくほうが、時によってはより根源的な見方を可能にするのではないかと思われる。

ところで、極く簡単にのべれば、『人間的時間』におけるジョルジュ・プーレの方法とは、作家、詩人などの「実在」(existence)を、彼等の思想の時間的側面から捉えようというもので、問題となるのはあくまで彼等自身にとっての時間であるから、たとえばある作家を対象とした場合、その小説に描かれた出来事の展開にかかわる作中での時間は無視されてしまうことになる。しかし本論文で筆者はプーレと同様に敢えて、ジイドという人間にとっての時間に焦点をあてることにした。他方、(間接的にはあるが)その作品における時間にかかわるものとしては『アンドレ・ジイドの作品における「因果関係」——ソチ、レシ、ロマンをめぐって——』を口頭で発表した。

最後に、本論文はまた次のような方針によって貫かれていることを申し添えておきたい。

たとえば三角の形をしたものを思いうかべよと言われたときの、ヨットの帆だとか、自転車のサドルの下のフレームだとか、トライアングルだとかのあいだには、それらがみな三角形をしているということ以外の共通点はないであろう。幾何学的な意味での三角形は、それ自体としては何らの具体的な実質も指し示すことのない、単なる形であるにすぎない。もっとも、こういった形自体もとげとげしさだとか丸みだとかいった表情をもっているわけだから、私はとげとげしい三角形よりもまるやかな円を選ぶな

どという好みが生ずるといふことはありうる。

人間の思考の場合にもこれと似たような、形あるいは形式への好みがあるように思われる。たとえばジイドの「自己放棄」の場合がそうである。「自己を放棄する」という一種の形式は同一でも、いかなる自己を放棄するのかにしたがってその意味あるいは、相矛盾するほどに多種多様となる。だが彼は、これらの実際を「自己放棄」という大雑把な同一の概念で捉えようとするのである。(拙論『アンドレ・ジイドにおける「自己放棄」について』³⁾参照)。

時間及び変化にたいするジイドの見方について検討してみると、たとえば、自分は止どまっているのに事物はたえまなく変化するといったふうに、「変化するもの」と「変化しないもの」とが対となって現われてくることが非常に多い。このような二元論的対比によって事物を把握するというジイドの傾向には、個々の問題についてのきめこまかな具体的検討によって得られた思考産物というより、既成観念として存在するジイドの考え方の一種の癖、思考パターンをみてとるべきではないだろうか。以下においてジイドの人間の時間について論ずる際、こういった思考パターンの存在を示すということを含みに持たせながら、特にその「変化と無変化」の様相に光をあてたい。

(2)

ジイドは処女作『アンドレ・ワルテルの手記』に「この世も、この世での欲望もやがて過ぎ去ってしまう」と書く。だから静かな「祈りと孤独」を求めなければならない⁴⁾。肉体は変化を被り腐敗するから、うつろわない不滅な《魂》(Âme)としての存在であるよう努めなければならない。「魂は飄々として死を通過する。／変化するのは肉体だけだ。それは塵あくたとなってしまう」⁵⁾。こうしてアンドレ・ワルテルは《魂》の不変性

3) 《千里山文学論集》第24号、関西大学大学院文学研究科院生協議会、1980、pp. 1-16.

4) André Gide, *Les Cahiers d'André Walter*, Gallimard, 1952, p. 123.

5) *Ibid.*, p. 156.

を渴望することで、この世のざわめきを、肉体の虚しさを乗り越えようとする。彼は流れゆく小川のせせらぎを聞きながら詩をつくる。その詩は、「静止した魂、対、変化の世界」という図式が感覚にまで高まった例であるとみてよいだろう。「長いあいだ時も忘れて我が魂は聞く——疾走を、時間の疾走を」⁶⁾。だが魂は、水を、透明なるがゆえに有って無きが如き水を前にした場合のようにいつも隠やかでいるわけではない。この《魂》は周囲の刺激によって時には、その古巣である次のような沈黙の環境からひきだされてしまう。「外部のどんなにささいな知覚も、無限に込みいった振動体系を私のなかで揺りうごかす。その振動は肉体のなかでも魂のなかでも呼応しあう。〔……〕しばしば私は、全くの闇と沈黙と、無言の静けさでみたされた周囲の気配が恋しくなる」⁷⁾。こういった沈黙と躍動の対照は次の場面にもみることができる。「時間の神秘的なかで、夜のしじまのなかで、何か得も言われぬ思いがこみあげてきて、涙が流れ、魂は肉体から抜けだし、口づけのなかにとけいろうとする。〔……〕同じふるえにつつまれるほど互いに近く寄りそって、五月の夜を妙なる言葉ではめうたい、そしてあらゆる言葉が黙したとき〔以下略〕」（傍点筆者）⁸⁾。

しかしこのふるえない躍動によって、魂は本質的に変わってしまうことがない。魂は、変化し動揺し打ちふるえながらも、同一の魂でありつづけようとするだろう。「魂は永遠の旅人であり、その本質を表現するために、至って、たえず更新し流転する形を閲し、おおくの生を閲しつつ、不安な流浪を追いもめてゆくものではないだろうか」⁹⁾。のちにも例を挙げることになるが、同一のものが変化の要素と同時に無変化の要素をも持つという例のうちに、この魂の場合をも数えあげることができよう。

そしてまた、魂がひたる沈黙の空気は、静かであると同時に、見方によ

6) *Ibid.*, p. 162.

7) *Ibid.*, p. 106.

8) *Ibid.*, pp. 33–34.

9) *Ibid.*, p. 157.

っては無限の変化を、可能性を潜在的にとじこめているものだとみること
もできよう。「無限のはじまりのような、不思議な静けさ」¹⁰⁾。「夜おそ
く寢床に入る。夜の静寂はいい考えを浮かべてくれる——しんと静まり
かえった時間の恍惚」¹¹⁾。

『手記』において、このように変化と無変化とが対になって現われるの
はどうしたわけだろうか。それは、変化するものによって不変なものが、
そして不変なものによって変化するものが一層ひきたつという純粋に美学
的な、審美的な理由によるものではないだろうか。彼にとって重要なのは、
何が変化するもので何が変化しないものかという具体的な検証ではなく、
如何なるものであるにせよとにかく変化と無変化とを対比させるとい
う形式である。彼にとってたとえば《魂》の内実の方は、そのときどきの状況
にしたがって、変化するものであっても不変なものであっても構わないの
である。

しかし、変化対無変化というこの審美上の構図も、モラルの問題にたや
すく適用されうる。「うっとりとしがちな肉体を御するためには、規則的
な勤行と儀式的な祈りに頼らねばならないだろう。——それにまた、さま
よいがちな私の精神が気をそらせたり、とやかく言ったりしないようにす
るためにも、こういった手段に力を借りねばならない」¹²⁾。このようにし
て宗教モラルは初めから、変化するものを規制する要素、無変化を助長す
る要素として捉えられるわけである。これを遵守するとは、自分の肉体を
含めた移ろいやすい周囲の状況の影響をうけないということであり、アン
ドレ・ワルテルにとっては「孤独」であるということである。もっともこ
の孤独のうちにあっても魂の崇高なふるえはある。「無限の感動に揺さぶ
られ、唇には詩句が次から次へと寄せてきた。私はこれを高らかにうたい

10) *Ibid.*, p. 183.

11) *Ibid.*, p. 150.

12) *Ibid.*, p. 124.

あげた。私は苦しみつつも孤独の味を楽しんだ」¹³⁾。作家の卵であるアンドレ・ワルテルが靈感をうけとるときのこのような孤独の状態はまた次のようなものでもある。「いい考えを浮かばせてくれでもしそうな静かな雰囲気。そのうえ、振り時計も懐中時計も止めてしまった。時間なんかどうでもいい。時間も空間もない絶対的境地のなかで仕事をしよう。——寝食に必要なものがありさえすればいい——時間なんかおかまいなしだ、時間は立ち去ってしまったのだから——そして、夜中に消えては困るので、ランプの油も要る」¹⁴⁾。時間も空間もないこの絶対的境地は実際にはこのように、時間の流れを感じさせるような一切の要素の念入りな排除によって演出されるのである。つまり彼は、時計を止め、定まった時刻に寝起きし食事をとるといった生活秩序を破壊し、ランプの灯を絶やさないことによって昼と夜の区別を否定するのである。（「真実の、永遠の次元においては時そのものさえ存在しない」¹⁵⁾ といった、ジイド晩年の作品『テゼ』の見方にしたがえば、アンドレ・ワルテルにおけるこの、時間が無視された状態は一種の「永遠」であるとみることができから、以下これを『手記』の「永遠」と呼ぶことがある）。

しかし、日常生活、とくに人との共同生活にあっては、このような演出を長期間にわたって成功させることは困難である。彼の静かな境地は、彼自身の生活によって、他人の存在によって絶えず乱されることになる。

「……（一時間後にはポールとピエールに会いに行かなくては。くそ、エチエンヌのことを忘れかけていた。あいつをがっかりさせるところだった。ついでにカフスを買わなくては。ロールも待っているぞ、花を持っていかなくては）。ああ、私の時間といたら、私の時間といたら死ぬまでこんなことに費されるんだ」¹⁶⁾。『日記』の1893年の分のあとに付け加えら

13) *Ibid.*, p. 165.

14) *Ibid.*, pp. 127-128.

15) *Thésée*, PL. III, p. 1436.

16) *Journal*, PL. I, p. 47.

れた『断章』にみられるこの文は、日常生活の徒らな忙しきの描出という点で、『パリュウド』の誕生を予告するものであろう。この『パリュウド』をめぐる「変化」の問題については節を改めて論じたい。

(3)

『パリュウド』の人物達はせわしなく動きまわる。たとえばユベールは、馬に乗り、四つの工場と関係をもち、雹害にたいする保険会社を経営し、一般生物学の講義に出席し、朗読会を開くなど、多方面にわたって活躍している¹⁷⁾。『パリュウド』は、このように動き回る人物達がかもし出す一種ざわざわとした落ちつかない雰囲気のみたされている。唯一人静止した眼をもちうる者があるとすれば、「ユベールにしてみても、動き回ったところでそれだけ多く生きたことになるのだろうか」¹⁸⁾ という『パリュウド』の作者——ジイド自身のことではなく、その『パリュウド』の作中で同名の『パリュウド』という作品をものしようとしている作中人物——であるが、こういう彼自身もまたこの徒らな日常生活から抜けだすことができないでいる。

彼はしかしこの日常生活を、めまぐるしいが「単調」であると感じるぐらいのセンスはもっている。生活が彼にあたえる感情は《退屈さ、空しさ、単調さ》¹⁹⁾ である。なるほど『パリュウド』の生活には「動き」はあるが、その動きは作中人物達に何らの本質的な変化ももたらしはしない。「ほかになすべきもっとよいことがないというただそれだけの理由で、毎日日々繰り返してなされるといったことがある。そこには進歩も、現状維持さえもみられない。だが、何もしないままにしているということもできないでいる。それは、檻の中を往ったり来たりする猛獣の空間的な動きだとか、海辺での潮の干満の動きだとかの時間版である」²⁰⁾。このような反復運動

17) *Paludes*, PL. III, p. 92.

18) *Ibid.*, p. 144.

19) *Ibid.*, p. 95.

20) *Ibid.*, p. 96.

は、一方では徒らにめまぐるしいという「変化」の性格のゆえに、他方では相も変わらぬ同じことの繰り返しであるという「無変化」の性格のゆえに蔑視されるのである。このような反復的行為を嫌うジイドは、一方では、『地の糧』で称揚されるような、めまぐるしくない静かな大自然へ脱出しようという「無変化」への希求によって対抗し、他方では、私は同じことは二度と繰り返ささないぞ、次々に新しい生をいきるぞという、以下にのべるようなやはり『地の糧』における「変化」の姿勢を持ちだすのである。このジイドの立場を別な角度からのべれば彼は、『パリュウド』の活動的な人物達の変化の面にたいしては前にも引用したように「動き回ったところでそれだけ多く生きたことになるのだろうか」とし、また反復的生活の《単調さ》に耐えられるような彼等の精神の硬化した面にたいしては、「個人は、豊かな資質に恵まれ、能力に富んでいるほど、より自在に変身するものなのである」²¹⁾ といった高飛車な姿勢でのぞむのである。

とはいえ、このような二様の姿勢をとるジイドは互いに矛盾しているわけではない。めまぐるしい生活は至って単調であり、動きまわってばかりいる人間の精神は至って硬化しているとすれば、同一対象における、変化の要素と無変化の要素を同時に攻撃したところでおかしくはないであろう。このようにして、変化するものと変化しないものとを対比せずにはおかないといったところにはやはり、ジイドの考え方の執拗な癖、思考パターンをみないわけにはいかないのである。

(4)

『地の糧』においてジイドは「瞬間」のもつ美しさを称揚する。「君の幸福のすべてを瞬間のうちに置きたまえ」²²⁾。このようにして瞬間に生きるということは、瞬間としては完結しないような生き方の排除を意味する。たとえば後の『狭き門』のアリサにおけるような、現在の幸福を犠牲にし

21) *Les Faux-Monnayeurs*, PL. III, p. 1202.

22) *Les Nourritures terrestres*, PL. III, p. 162.

てまで死後の幸福のために生きるといった宗教的姿勢は断罪されることになる。「生涯の四分の三は幸福の準備に費される。だからといって残りの四分の一がその享受に費されると思ってはならない。こうした準備をするということがあまりにも執拗な習慣となってしまうと、自分のための準備が終ってしまうと、今度は他人のための準備にとりかかる。こうして至福の時は死の彼方へと追いやられる。だからこそ人々は永生をあれほど信じねばならないのである」²³⁾。このとき『手記』の「飄々として死を通過する」という魂は否定される。「瞬間」がこのような破壊力をもったのは、それが過去に依存せず、特定の未来、たとえば『背徳者』の夫婦が心待ちにしている子供の誕生²⁴⁾といったような特定の未来も当てにしない、孤立した時間であったからだろう。

とはいえ『地の糧』の「瞬間」は他面においては、孤立することなく継起してゆくと考えざるを得ない。今の瞬間と前の瞬間とのあいだに何らかの関係を認め、それらを比較するのでなければ、刻々と生まれてゆく今の瞬間の、次のような《新しさ》を見極めることはできないであろう。「この日から私の生の各瞬間は、断じて言いようもないほど新鮮な贈物の味わいをみせてくれるようになった」²⁵⁾。これらの瞬間は次から次へと新しい盛りあがりを見せる湧き水のようなもので、水はそのたびに新しい面をさらけだすであろう。「君のヴィジョンが、各瞬間々々に新しくあるように」²⁶⁾。このような《新しさ》を前にするとき彼は、いかなる微妙な変化にも対応できるような柔軟な姿勢、自由ディスポニブル自在な姿勢をとらねばならない。「我々は各々の新しさにたいして全く自由自在であらねばならない」²⁷⁾。こうして『地の糧』の「瞬間」は、その孤立性によって、永生という幻影にからみついた宗教モラルを破壊し、その継起性によって円熟期のジイド

23) *Journal*, PL. I, p. 56.

24) *L'Immoraliste*, PL. III, p. 438.

25) *Les Nourritures terrestres*, PL. III, pp. 164-165.

26) *Ibid.*, p. 162.

27) *Ibid.*, pp. 184-185.

の柔軟さを予告するという二面をもつと言ってよい。

さらに二面性ということに関して言えば、『地の糧』の「瞬間」は、以上でのべたようにその継起性によって変化の様相をも帯びる一方、以下でのべるようにその孤立性によって無変化の様相をも帯びるといってよい。

つまり、孤立した瞬間々々に生きるということは、瞬間によっては生きえないような、ある時間の経過を必要とするような動的な生、たとえば日常生活の切り捨てを意味する。ジイドは『地の糧』に「私は、孤立した喜び全部のために、各瞬間を私の生活から切り離す習慣をつけた」（傍点作者）²⁸⁾と書く。こうして『パリュウド』の舞台でもあるあのめまぐるしい変化の生活が敬遠されるわけである。日常生活の回避という点においては、ジイドは『手記』から『地の糧』まで一貫した姿勢を守っている。『手記』においては物音一つしない書斎のなかに静けさがもとめられたが、同じように、『地の糧』で描きだされたような大自然にも、日常生活にはない静けさが見出されるであろう。

ところで、人間的意味における「瞬間」と「永遠」とを物理的時間と関連づけるとすれば、「瞬間」とはいかなる変化も眼にはみえない程度の短い時間であり、また「永遠」とは、一秒なり一年なりのある有限な時間内において、人間の眼には無変化としか見えない程度の緩慢な変化しか呈さない対象が与えるあの静止した感じの延長として生ずる観念であるといえないだろうか。とすれば瞬間と永遠は、不変という点で相通ずることになる。静物を眺めるときの数秒も、ほんの一瞬であると思われたり、永遠であると感じられたりすることがある。ジイドはドストエフスキーの『悪霊』から次の文を引いている。「時間が急に停止して永遠が訪れるといった瞬間、あなたも達することがあるかもしれませんが、そういった瞬間があるものです」²⁹⁾。またジイド自身も「各瞬間にあの永遠性を意識しえないならば、私にとって永生も何になろう」と書く³⁰⁾。

28) *Ibid.*, p. 172.

29) André Gide, *Dostoïevski*, Gallimard, 1970, p. 183.

30) *Ibid.*, p. 184.

ジョルジュ・プーレは、ティオフィル・ゴーチェについて論じながら、永遠性と非時間性が相通ずるものであるとしている³¹⁾。そして「時間と空間を越える」ことの好きな『手記』のアンドレ・ワルテルに加えて、『背徳者』のミシェルも——『地の糧』で称讃されたような瞬間の美学へと傾斜してゆくミシェルも——時間の不在という感覚をもつ。「それは光と影に満ちた場所であった。静かで、時間もよけてとおるかのような場所であった」³²⁾。かくして『地の糧』や『背徳者』における瞬間＝永遠において問題なのは、感じとられる時間の長さというより、時間の不在である。このとき、時間にかかわる事象の不在、たとえば既述の日常生活の不在だけではなく、次にのべるようなモラルの不在もまた要請される。個人のモラルないし社会のモラルは、ある時間的展開をもつ人間的事象に係わる因果関係についての、人それぞれの経験則ないしは与えられた知識や教訓であると考えば、このようなモラルが有効であるのは、時間的展開をもつ人間的事象を前にしたときだけであるにすぎない。ジョルジュ・プーレはまた、習慣と時間の意識の問題にふれながら、バンジャマン・コンスタンから次の文を引用する。「モラルは時間を必要とする」³³⁾。もっとも、瞬間に生きること、すなわち一種無道徳的であることこそ私のモラルだという言い方もできるわけだから気をつけねばならない。たとえば（『地の糧』を思わせるような無秩序状態に身をおくことによって）「力を出しきること。それが今や私のモラルとなった。そして私は他の諸々のモラルをもはや欲しなくなった」³⁴⁾ というときのように。かくして『地の糧』の「瞬間」は、その孤立性によって、またその非時間性によって、めまぐるしい日常生活およびこれと不可分な社会秩序への適応を促すようなモラルに対する否定をもたらすと同時に、この「瞬間」が次々と世界の新鮮さをみせ

31) Georges Poulet, *Etudes sur le temps humain I*, p. 317.

32) *L'Immoraliste*, PL. III, p. 392.

33) Georges Poulet, *Etudes sur le temps humain I*, p. 282.

34) *Journal*, p. 45.

てくれるとき、その継起性によって、より感性的な次元での新しい変化の世界を——日常生活から遊離しているという点では『手記』の「永遠」と同様それでもやはり一面で非時間的な世界を——ジイドにさししめすことになったのであるといえよう。

(5)

「変化」の性質を調べる際、その変化が可逆であるか不可逆であるかに注目することは重要であろう。

さて、『手記』の永遠にせよ『地の糧』の孤立した瞬間にせよ、また(63頁で説明するように)世界のあの《新しさ》をみせてくれるような継起する瞬間でさえもであるが、これまでジイドが引き受けてきた時間は、《やりなおしがきかない》といった由々しきを持たない点ではいわば「可逆」である。(より厳密に考えるならば、この永遠および孤立した瞬間の場合には、「変化」をもたないがゆえにその可逆性も名ばかりのものであるから、「少なくとも不可逆ではない」と言った方が正確である)。こうしてジイドは、「流れてゆく時間はすべてのものを覆す」³⁵⁾ といったときの「時間」がもたらす、あの《やりなおしのきかない》ような不可逆な現実から身を遠ざける。また彼が拒む方の『パリュウド』における反復的時間も、反復ということの性質上、可逆である。彼が日常生活の反復的性格をこれほどまでに攻撃するのも、その不可逆的側面の由々しきをよく見なかったからではないだろうか。

人間の生の不可逆性がジイドの作品において問題となるのはようやく、『背徳者』をはじめとするレシ群、それにいわば複合されたレシであるといってもよいロマン『贖金つかい』に及んでからである。『背徳者』においても、『狭き門』、『田園交響楽』においても、また晩年の三部作においても描かれているのは取り返し^{のつかない}失敗の人生である。(この点に関しては拙論『アンドレ・ジイドの「現実」』参照)。

35) *Le Traité du Narcisse*, PL. III, p. 7.

もっとも、レシの人物達の生に一面では「共感」しながらも、私だったらこうは振舞わないぞといった「イロニー」を捨てざるのできないジイド³⁶⁾の描きだしたものは、成功しえたにも拘らず失敗した一人生である。この点たとえば、人生とはもともと失敗の歴史なのだといったフローベールのペシミズムに貫かれた、『感情教育』のフレデリックや、「ブヴァールとペキュシェ」や、『サランボー』のマトーなどの生と、ジイドのレシに描かれた人物達の生は性質を異にする。レシの執筆によってジイドは、不可逆な生をいきる真似事をするにすぎず、擱筆とともに彼等から遠ざかりうるとき、彼は自分の立場を「可逆」であると感じるだろう。作家としてのジイドは、彼のいう《劇場》³⁷⁾のようなものである。幕がおりてしまうと、様々な人物達で賑わった劇場ももとどおり静まりかえるであろう。彼にとって作品とは「私の魂を劇場とする、いくつかの観念の闘争」³⁸⁾である。ここで《魂》という語が復活する。不可逆である生のざわめきから時間と空間を越えることによって身を守る『手記』の《魂》と、作中人物達のざわめきをよそに冷静さを保っている、円熟期のジイドの《劇場》は幾分似ているであろう。こうしてうごめく作中人物達を不変な《劇場》が容れるとき、あるいは、可逆な舞台上で不可逆な劇が演じられるとき、変化するものと不変なるものの並置という図式をここでもまた思いうかべることができるであろう。

時間のなかで生きてゆくということは、好むと好まざるとにかかわらず《選択》すること、決定を積み重ねてゆくことであり、生における不可逆の度合を増加させてゆくことである。ヴァレリーも「人生とは各自にとって、ある個——自己——の決定を増加させてゆくことである」³⁹⁾という苛酷な事実を認めている。だが『地の糧』以来、《新しい》瞬間々々を次か

36) *Journal des Faux-Monnayeurs*, Gallimard, 1972, p. 68. および *Journal*, PL. I, p. 428. 参照。

37) *Journal*, PL. I. p. 783.

38) *Ibid.*, p. 783.

39) Paul Valéry, *Cahiers I*, 《Bibliothèque de la Pléiade》, 1973, p. 39.

ら次へと生きてゆくことはジイドにとって、以下で説明するように、不可逆なものとしての過去に別れを告げることであり、したがって不可逆の度合の減少を、ときには清算を意味するものである。

想起するたびごとに別々の様々な形をとって現われ得るような、新鮮で柔かいプルースト的過去とは違って、ジイドの「過去」は、ひとたび作りあげられてしまうや梃でも動かしがたいような重さ、固さでこわばっている。「末期の時に、我々の姿は過去のうちにうつしだされるだろう。〔…〕我々の全生涯は、ぬぐいさり難い一つの肖像を描きだすために費される」⁴⁰⁾。「瞬間ごとに、書きつける一語ごとに、行なう一動作ごとに、それが私の肖像に消しがたいしを付け加えることとなって固定化してしまう、という考えが浮かんできはしないかと私は恐れている」⁴¹⁾。(ここで、豊富に例をあげる余裕はないが、「末期の時に」などとあるように、多くジイドの過去は死の気配と隣りあっていることを指摘しておきたい)。このように書くジイドにとって今まで送ってきた人生とは、過去から現在まで引かれた抹殺出来ない一本の軌跡、一枚の肖像画であって、現在の瞬間の一動作とはその肖像画につけくわえる一筆^{ひとよで}である。肖像画を完成させるために彼は、すでに描かれた分の構図や彩色という過去によって縛られることになる。現在のなまあたたかい一瞬も、すぐにあの死臭を放つ過去のなかへと繰り入れられてしまうのだと思えばたちまちにして凝固し、開花する間もなくいわば過去化してしまうであろう。だがこれではいけない。「いかなる人にも、驚くほどの可能性がある。もし、今からすでに過去が現在に一つの歴史を投げかけているのでないならば、現在はあらゆる未来でもってふくらむはずなのに」⁴²⁾。現在というものを過去から切り離し、多様化させなければならない。ロラン・バルトの言葉を借りるならば、現在の瞬間の《爆発》(éclatement)が必要である。こうして、あらゆる可

40) *Journal*, PL. I, p. 29.

41) *Ibid.*, p. 28.

42) *Les Nourritures terrestres*, PL. III, p. 158.

能性を、（特定のではなく）不定の未来を孕む現在の刻々と《新しい》瞬間を生きてゆくということはジイドにとって、不可逆の割合を増加させつつ己れの生を限定してゆくことではなく、反対に、己れの生を限定する要素である不可逆なものとしての過去との訣別によって、無限定な可逆の生を獲得することとなる。彼は絶えず「生成する」(devenir)⁴³⁾。彼は、いつでももとに戻れるという可逆な生における一種の不変性を入手するために、絶えず蘇生し「生成」し変化しつづけねばならないのである。

だが、不定な未来におけるあらゆる可能性を信仰するジイドは、人間の生は有限であるという動かしがたい事実を無視しているように思われる。自分の生が果てしなく拡がっているという、よく青少年期にみられるようなあの錯覚があったからこそ彼は、生の無限性を保証するような、少なくともこれを裏切らないような「可逆性」にあれほど固執したのではないだろうか。彼は五十一才の誕生日に「時間とは、今のところ私の念頭にはない観念だ」と言ったそうである⁴⁴⁾。彼は死ぬまで若々しさを失なわなかったのである。

(博士課程後期課程)

43) *Journal*, PL. I, p. 830.

44) Maria Van Rysseberghe, *Les Cahiers de la Petite Dame*, 《Cahiers André Gide 4》, Gallimard, 1973, p. 60.